入にけり、法師たゞ人にあらずと思ひて、いかにすべしともなく、おそろしく覺へければ、はふはふくづれおちてにげにけり、くはしく尋聞ば八幡太郎義家也けり、いよ〳〵おくする事限なかりけり、

〔今昔物語二十八〕近衞御門倒人蝦蟆語第卅一

今昔□天皇ノ御代ニ、近衞ノ御門ニ人倒ス蝦蟆有ケリ、略○中而ル間一人ノ大學ノ衆有ケリ、○中略平ミ居ル蝦蟆ヲ踊リ越ル程ニ、○下略

〔平治物語三〕牛若奥州下事

牛若ハ、○略中晝ハ終日學文ヲ事トシ、夜ハ終夜武藝ヲ被稽古タリ、僧正ガ谷ニテ、天狗トヨナ〳〵兵法ヲ習ト云々、去バ早足飛越、人間ノ業トハ不覺、

〔平家物語五〕文覺ながされの事

剩文覺に、是程まで、からきめを、見せ給ひつれば、○略中黄泉のたびに出なん後は、こづめづのせめをば、まぬかれ給はじ物をと、をどりあがり〳〵ぞ申ける、

〔平家物語十一〕のと殿さいごの事

新中納言とももりの卿、○略中判官○源義經を見しり給はねば、物のぐのよき武者をば、判官かとめをかけて飛でかゝる、○略中判官の舟にのりあたり、あはやとめをかけて飛でかゝる、判官かなはじとや思はれけん、長刀をば弓手のわきにかひはさみ、みかたの舟の二丈ばかりのきたりけるに、ゆらりととび乘給ひぬ、のと殿はやわざやおとられたりけん、つゞいてもとび給はず、

〔太平記十四〕官軍引退箱根事

舟田入道ト大將義貞朝臣ト二人、橋ヲ渡リ給ヒケルニ、如何ナル野心ノ者ガシタリケン、浮橋ヲ一間ハリヅナヲ切テヅ捨タリケル、○略中此馬ノ落入ケル時、橋二間計落テ、渡ルベキ樣モナカリ